

桜 作 山 車 の 製 作 は 手 間 が か かる 。 祭 り に か たる 人 た
 は 山 車 の 製 作 に も 参 加 す る よ う に な っ た 。 特 に
 大 太 鼓 、 篠 笛 の 練 習 に 励 み 、 数 年 が 経 っ 頃 に
 っ た 。 七 月 か ら 毎 年 の よ う に 練 習 に 参 加 し 、 小 太 鼓 、
 ど ま で に 、 大 地 は 山 車 に 魅 了 さ れ た の だ 。 所 ほ
 大 地 は そ れ ら に は 目 も く れ な かつ た 。 所 ほ
 の 様 な 屋 台 が 人 々 の 目 を 惹 き 付 け て い た が 、
 は 輝 き 、 そ し て 祭 り に 一 か た り 人 た ち の 周 囲
 を 担 っ て い る 。 祭 り に 一 か た り 人 た ち の 目
 っ て も 風 流 と 見 返 し の 人 形 た ち が 山 車 の 主 役
 松 や 桜 、 藤 の 花 で 満 ち て い た 。 所 し て 何 と い
 た 。 紅 白 の 牡 丹 の 花 と 波 が 両 脇 を 飾 り 、 上 は
 う 。 し か し 、 そ れ は 同 時 に 美 し い も の だ っ た だ ろ
 く 、 迫 力 が あ り と て 、 山 車 は あ ま り に も 大 き
 小 さ な 子 供 に と っ て 、 山 車 は あ ま り に も 大 き
 地 は 初 め て 山 車 を 見 た 。 幼 稚 園 児 だ っ た 頃 、 大
 地 も そ の 一 人 だ っ た 。 人 は そ れ に 魅 せ ら れ る 。 大
 兼 ね 備 え 、 多 く の 人 は そ れ に 魅 せ ら れ る 。 大
 が 、 着 実 に 進 み 続 け る 山 車 は 迫 力 と 美 し さ を
 山 車 が 動 き 出 す 。 音 を 立 て て 木 製 の 車 輪 が 回 り 、
 小 太 鼓 と 大 太 鼓 、 篠 笛 、 鐘 が 鳴 り 響 く 。 続 い て
 サ ー 、 ヨ ー 、 ヨ ー 、 ヨ ー 、 ヨ ー 、 ヨ ー 、 ヨ ー 、 ヨ ー
 頃 、 岩 手 県 の 紫 波 町 に は ま だ 夏 の 熱 気 を 冷 ま す 。

休 日 ば い け な い 。 作 業 で は あ っ た が 、 夏 の 暑 さ も あ
 装 や 見 返 し の 鯉 づ っ た 。 風 流 の 二 体 の 人 形 の 衣
 滝 登 り ー に 決 ま っ た 。 風 流 の 二 体 の 人 形 の 衣
 信 が 戦 っ た ー 川 中 島 の 戦 い ー 見 返 し は ー 鯉 の
 の 風 流 は 甲 斐 国 の 武 田 信 玄 と 越 後 国 の 上 杉 謙
 が 被 ら な い よ う に 話 し 合 っ た 結 果 、 大 地 の 組
 備 は 忙 し く な っ た 。 複 数 の 組 が 集 ま り 、 山 車
 七 月 末 、 祭 り ま で 二 ヶ 月 を 切 り 、 祭 り の 準

こ の 空 間 が 好 き だ っ た 。
 く 。 気 づ く と 皆 、 寒 さ を 忘 れ て い る 。 大 地 は
 作 業 の 醍 醐 味 で あ る 。 凍 え る よ う に 寒 か っ た
 作 業 の 醍 醐 味 で あ る 。 凍 え る よ う に 寒 か っ た
 「 最 近 よ う や く あ っ た か く な っ て き た ね ー
 「 ま だ 決 ま っ て な い ほん で す よ ね ー
 さ っ き よ り も 大 地 が 間 を 空 け て 、
 「 高 校 ど こ い く の ？ ー
 と 答 え る と 、 お ば さ ん は 続 け て 、
 「 十 五 歳 に な り ま し た ー
 大 地 が 少 し 間 を 空 け て
 「 何 歳 に な っ た の ？ ー
 し か け て き た 。

る 。 地 道 な 作 業 だ が 山 車 に 近 所 の お ば さ ん が 話
 地 も ま た 、 作 業 場 に 集 ま り 、 桜 は 欠 か せ な い 。 折
 め る 。 や は り 、 み ん な 祭 り が 好 き な の だ 。 大
 ち は い つ と も な く 作 業 場 に 集 ま り 、 作 業 を 始

り、たった数時間作業をしただけでぐったり
 するほどだった。来週も予定して
 「今日はここまでとします。来週も参加してくださ
 い」
 義郎さんが額の汗を拭いながら言った。義
 郎さんは山車の製作、運行などさまざまな役
 割を一手に担っている人だ。何と言っても音
 頭が上手で、他の組と比べても頭一つ抜けて
 いると誰もがわかるほどだった。大地はこの
 橋本組の中心的な立ち位置にいる。義郎さん
 に憧れていた。だから、夏の暑い日でも毎回参
 加し、義郎さんと一緒に作業をしていた。

た。次の日、大地はいつも通り中学校へ登校し
 そわそわと、落ち着かない雰囲気、学校全体が
 いた。教室に着く頃には既に汗だくで、エア
 コンがつくまで大地は手で顔を扇いだり、ク
 ラスメイトと扇風機に列を作ったりして涼んだりし
 た。ようやく汗が引いて落ち着いたところだ
 席に帰り、バッグから教科書を出そうとした
 時、龍之介が話しかけてきた。
 「おはよう。今日暑くない？」
 「しかし、大地は無反応だった。」
 「そろそろ夏休みだよ。マジで嬉しい。」
 「そう話しかけられても無視したままだよ。」
 「と、ごめん。先週のこととは許してくれよ。」
 「お、まだ怒ってる。先週のこととは許してくれよ。」

龍之介はおどけた口調で謝った。しかし、結局、大地が反応することはない。チャイムが鳴って先生が教室に入ってきた。

「ホーメル先生は慣れた口調で言い放つ。早く座ってー」

ように生徒たちは自分の席に戻っていった。

先週の金曜日、二人は些細なことがきつかけだった。

ホーメルが始まるまでの時間を過ごして、

「明日遊ぼうぜ」

大地が言う、

「明日？ 明日は無理かも。部活ある」

龍之介はそう答えたあと、続けて、

「なら、あさって遊ぼうぜ。大ちゃんも日曜は暇っしょー」

は、

大地は少し悩んだ後、答えた。

「日曜は無理。祭りの作業がある。また今度遊ぼうぜ」

しかし、龍之介は食い下がった。

「えー。祭りの作業？ 別に行かなくても良くてね？ どうでもいいじゃん。そんなのほっといて、遊ぼうよー」

大地は自分の肩に置かれた龍之介の手を払って答える。

「いや、無理だから。どっか行けよー」

大地は即答したが、それは自分でもびくつき、

龍之介は冷たい、突き放したような声だ、

言葉が出ないのか、それ以降会話が続き、

なくなつた。居心地が悪くなつたのか、龍之介はホームルムが始まる五分前には自分の席に戻つてゐた。大地は机に突つ伏し、動かない。ういゝとも、友達と祭りを天秤にかければ迷ふものだ。迷つた挙句、大地は祭りを選んだ。のだが、その時投げつけられた龍之介の言葉は祭りを小馬鹿にするものに思えて許せなかつた。龍之介もまた、モヤモヤした気分だった。自分の発言が悪いことは分かっている。しかし、祭りと天秤にかけられ、しかも自分が選ばれなかつたことは悲しく、「どっか行けよ」と言われたことにはちよつとした苛立ちが込み上げてきた。二人はそれ以降、目が合うことにはあつたものの、会話をすることはない。気分のまま学校を後にしたのだつた。

やはり、龍之介に素直に謝ろうとは思ひ出していた。大地は、怒りよりも、素直に謝ることのできた大地は、自分に対して、教室はエアコンの物きかない自分に耽つてゐるうちに、ひんやりとした空気が大地の肩を震わせた。

蝉時雨とチャイムが重なつて絶妙なメロディを奏でた後、生徒たちの喜びの声が学校中にあふれた。とうとう、夏休みがやってき

たのだ。龍之介は急いで机の中の教科書やロ
 ッカ―の荷物を手いっぱいには持って学校を
 飛び出した。大地がここ数日、持ちちはあまり晴れな
 かった。今日も大地がここ数日、持ちちはあまり晴れな
 て、今日も大地がここ数日、持ちちはあまり晴れな
 ができないまま長い夏休みが始まる。仲直り
 いた。夏休みが始まり、一週間が経った。十分
 之介はある場所に向かおうとした。十分
 ほど歩いて到着した建物。壁にはツタが茂つ
 ており、お世辞にもきれいと作業場だと言えな
 の。昼間ということもあって作業場には誰もい
 なかった。が、入口が開いていた。龍之介
 は作業場に足を踏み入れた。木材やボンドのにお
 刺入った瞬間、木材やボンドのにおいが鼻を
 たり、毎年作られるポスト―が、一列にそして
 丁寧な貼られていた。さまたぎな工具
 が置いてあり、奥には大量の半紙とピンク色
 のインク、そして鉄パイプ製の椅子が並べら
 れている。作業場となく殺風景な空間を、真
 夏の日光射しがどことなく神秘的に見せていた。
 う。龍之介の体からは汗が流れ落ちる。熱中症
 になりそうだった。入口に戻ることにす
 る。その時、外に出ようとする龍之介の目は
 一枚の写真をとらえた。それは山車の前で撮
 られた祭りにかた人たちの集合写真だった。

老若男女問わず、彼らは楽しそうな笑顔を浮かべている。その中に大地に似た顔立ちをした、十歳くらいの男の子がいた。その子は、中学に入学して以来、ずっと一緒に笑顔を介でさえ見たことのないくらい、の笑顔をしていた。龍之介はハツとした。大地が祭りをどれほど愛しているのか。その時初めて理解できた。よ。うな気がした。夏休みが終わったらちゃんと謝ろう。龍之介は額に滲んだ汗を手で拭いて作業場を後にした。夏休みは風邪をひいて寝込んでいた。外と室内との極端な温度差によるもので、だらう。微熱が三、四日続き、学校も休んでいた。カチツ、カチツ、カチツ、カチツ。時間も長く感じた。さっきまで冷たかった氷枕は既に生ぬるくなっている。大地は夏休みに入る前に、室内に満ちている。大地は結局謝ることができないうちで、まだあった。ここまで龍之介と距離を置くつもりはなかった。あの時、自分も謝って、いれ、天井のまつすぐな木目を見ながら、何度か思った。しかし、時計の秒針は、一歩ずつ確実に進んでいく。大地は、何ともいえない気持ち。持ちのまま夏休みを迎えた。

八月に入り、祭りの本番まであと数週間になる。と、山車製作は佳境を迎える。大地は昼

間は部活と夏休みの課題に励み、夜は太鼓練習をし、さらにそのあと山車の倉庫となつて
 いる。「かけす」の中にある山車の上で作業を行つた。太鼓練習には小中学生合わせて二十人ほど
 が参加する。初心者から経験者まで楽しみながら太鼓を叩く。中学生になると大太鼓と篠
 笛の練習がある。夜になつて多少涼しくなつたとは言え、八月の大暑さは人々の体力を奪つ
 ていく。しかし、大太鼓の迫力ある音や篠笛の華やかな音はいよいよ祭りが始まることを
 実感させ、町に活気を生む。大地は太鼓も篠笛も三年目でそれなりに腕前を磨いていた
 た。ため、それほど練習で苦労することはない。なかつたが、練習の時はいつも少し年
 齢が上の人たちによく温かい。小一時ほどの太鼓練習はあつという間に終わり、一
 時間のかけすでの作業に移る。仕事終わりの大人たちが三々五々集まつてきて、大
 工の新井さんを中心に山車の舞台に人形をのせたり、松をのせたりしていく。大地も山車
 の確認や衣装の運搬を一生懸命にやつていた。の確かし、事件は突然起こつた。作業場から
 桜を「かけす」まで運ぶ途中、大地はコンクリートの段差に足を引っ掛けて転んでしまつ
 たのだ。連日降り続く雨によつてあちこちで水たまりができており、そこは桜が落ち
 てしまった。幸いにも半分以上は汚れることなく間に合った。

なく使えそうだったが、三割近くは水に浸つ
 てしまつた。大地は急いで桜を拾い集めはじ
 めた。作業場から少ない。この日もやはり人の
 配はなく、聞こえるのは大地自身の乱れた呼
 吸と木々が穏やかにざわめく音だけだ。雨雲
 が一息ついたように空は晴れ渡り、満天の星
 空が大地を見下ろしていた。大地は、使え
 なく、やぐ桜を全て拾い集めた。大地は、使
 向かい、ベンチに腰かけていた義郎さんのも
 とにおぼつかない足取りで近づいていく。
 「義郎さん、すいません」
 「なんど謝ればよいのかからず、大地は思
 いをそのまま不器用に伝えた。
 「ん？ どうしたの？」
 義郎さんはすぐに、若干桜が減っているこ
 と、大地が額に汗を浮かべ膝を少し擦りむい
 ていることに気づいた。
 「膝だいじょうぶ？」
 「大地は何も答えることができなかった。
 「今日、休んだほうが良いよ」
 「義郎さんにそう優しく語りかけられ、大地
 は小さな声で「はい」と答えるのがやっとだ
 った。
 帰宅した大地は、夕食も取らずに自分の部
 屋に入ると、枕に顔を押し付け、桜を台無
 しにしてしまった。罪悪感、そして自分に対す
 るやるせなさに押し潰され、とうとう意識が遠
 かり、しばらく押し潰され、とうとう意識が遠
 かり、しばらく押し潰され、とうとう意識が遠

それととも擦りむいた膝の痛みが和らいでいく。体の力がすうっと抜け、眠って

大地はそれから一週間、太鼓練習にも作業に取りまで太鼓練習に向かう大地を夜になると軽い足取りで太鼓練習に向かう大地を心配した母は夕食を済ませて部屋に戻っている大地に声をかけた。祭りの嫌になっただの？ なんて行かないのよ。

大地の動きが止まった。もう一言投げかける。とする大地の背中に母がもうなら、いきなよ。みんな待ってるんじゃない。

自分の部屋に戻った大地はそのまま行ってしまった。自分の部屋に伏した。返される。母親に言われた言葉に突っ伏した。繰り返される。大地だって本当は行きたかった。水たまりに浮かぶ桜の花がどうした。でも、水たまりに浮かぶ桜の花がどうした。午後七時半ごろ、一階で洗い物をしていた母に大地が声をかけた。

「母はすぐに行つてくたせ。」

大地は作業場には誰も向かった。静かだった。照明
 作業場には誰もおらず、鉄製のパイプ椅子の傷
 が月光に照らされてギラギラと光り痛々しい。
 作業場には日中の暑さが少し残っていて、ボ
 ンドと木材の混ざった外から聞こえる蟋蟀のゆっ
 たりとした鳴き声と大地の呼吸のテンポがだ
 んだんと重なる。作業場の一部となっていて誰か
 分ほど過ぎたあと帰ろうとする、誰かの
 足音が聞こえてくる。橋本組の人だったらど
 うしよう。もしかしたら義郎さんかもしれない。
 い。不安な気持ちだが作業場を満たしていく。
 コンクリートを踏む音が大きくなる。緊張
 で体が動かなくなったり座り込んだ。段々と近づ
 諦める。パイプ椅子に座り込んだ。段々と近づ
 いてくる足音。その正体は、散歩のついでに
 作業場に立ち寄った龍之介だった。
 「えっ」
 安堵した大地の体から力がすうっと抜けて
 いく。数秒間沈黙が続いた後、龍之介が口を
 開いた。「ここ、なんか落ちてくよな」
 「大地は小さく頷いた。龍之介がなぜここに
 来たのか分からなかったが、そんなことはど
 うでもよかった。」「
 「この前は、ごめん」
 「顔を真っ赤にして龍之介が言う。

久しぶりの再会にあちらこちらで明るい声が
 飛び交うなか、義郎さんや新井さんは最後ま
 で山車の上で作業をしている。こんな光景も
 大地は好きだった。前に皆さんで写真を撮りま
 しょう。子供たちから山車の前に並んでくだ
 さい。義郎さんの声が山車の上につけられたスピ
 ーカースランが細かい指示を送る。人が並び始め、
 を切る音は賑やかな話し声でかき消された。そ
 の後、大人が数人がかりで山車を「かけす」
 から出すと、両側に括り付けた縄を前の方に
 伸ばしていく。掛声に合わせて人々が一斉に綱を引っ張
 る。ギィ。鈍い音を立てて山車はゆっくりと動き出し
 た。山車は商店街を下りながらゆっくりと神
 社に向かう。今日は音頭奉納の日だった。篠
 笛の鮮やかな音色や小太鼓と大太鼓のゆった
 りとした迫力のある音が心臓に響く。
 「やっぱりかたこれだ」
 祭りにかたる人たちは皆そう思っているだ
 ろう。大地もまたこの瞬間の興奮を噛み締め
 ていた。大地たちは、小一時間かけてようやく神社
 に到着した。他の三組はすでに到着していた。
 「えー、ただいま橋本組、神社に着きました。」

小学生から順に境内に入り他の組に倣って並
 んでくださいー
 義郎さんは額の汗を手ぬぐいで拭きながら
 ピンマイクで話しかける。大地も指示に従い、
 小学生を連れて境内に向かう。境内に着くと、
 ーそれでは音頭奉納を始めます。四組の皆様
 は一列に並び、各組代表のお二人は列の前に
 お並びくださいー
 と声がかかり、義郎さんが前に向かう。
 四組がそれぞれ一列に並び終え、場が静まり
 返る。
 ーそれでは上組の皆様、音頭奉納をお願いし
 ますー
 上組の音頭が始まった。音頭を奉納する人
 たちは皆とても上手で、何度聞いても耳を奪
 われる。上組の音頭が終わると一斉に拍手が
 起こった。司会の宮司さんが、
 ー上組の皆様、有難うございました。続いて
 は橋本組の皆様、音頭奉納をお願いします。続
 いて橋本組の音頭奉納が始まる。義郎さんは力
 強く空気を吸い込み、その迫力を神社中に響
 かせる。一瞬にして空気が変わる。その力強く、
 しかしそれでいて華やかで美しい。その声は、
 まるで山車そのもののようだった。何度聞い
 てもその魅力は色褪せることがない。何度聞い
 なって耳を傾けているうちに、音頭上げは終
 わっていった。義郎さんが一礼する。大地も精一
 時に各組から拍手が沸き上がる。大地も精一
 杯の拍手を送った。残りの一番組、下組も見
 事に音頭奉納を終えて一同は解散し、神社を

後山車にしたら。橋本組は来たと、辺りは暗くなり始めていた。その途中、商店街には多くの屋台が立ち並び、またさんの人でごった返してゐないか。祭りが始まったり、屋台を回ろうとしてみんなに誘われたが、大地は眠気が勝ったためそれを断つて、家に帰った。

翌日、大地は朝起きると外では小雨が降っていて、開けた祭りが中止になるほどではないが、山車を濡らすわけにはいかないので、掛けす。を出る前に透明なシートを掛ける必要がある。大地は集合時間の三十分前に、かきす。と一緒に山車全体にシートをかいた。二日目と見えていたが、賑やかな顔には少し疲れが。日中は街全体を広く回し、夜のパレードに備えるために少し早めに「かけす」に帰り、弁当をみんなで囲んだ。山車が再び動き出す。パレードの開始地点に向かうため、商店街を駆け上が。る。大地は篠笛を任された。担当する人は大。地だけではない。商店の両側には赤提灯が綺麗に飾。られた。多くの祭りの人の弾むような声で溢れる。少。うれすぐ祭りが終わってしまふと考える。少。

「おおっ、おう」
 大地は篠笛を吹くのを止めて近づいた。
 「元氣？」と龍之介が聞く。
 「まあ、元氣」
 大地が答える。作業場で会った時よりも会話を指差し、上杉謙信と武田信玄だよな。なんか、少し前の俺たちみたいじゃね？」
 「言われてみれば確かに！」
 大地はハツとした表情を浮かべ龍之介を見睨みつけている場面だった。二人の目が合つた。どちからともなく二人はくすくすと笑いはじめた。笑ったあと、大地は思い切つて口を開いた。まだ俺だけ謝ってなかったよな。前は自分勝手に怒ってごめんな。：：じや、俺行くわ。笛吹かないといけなし」
 それだけ言う。大地は小走りで山車に戻つていった。龍之介はもう一度声をかけようかとしたが、大地の後ろ姿を見つめることしかできなかった。龍之介の目に見返しが映る。見返しには急な滝に打ちのめされても懸命に滝を登ろうとする鯉の姿が描かれていく山車をじっと見つめた。自分から離れていく山車をじっと見つめた。

前パレードが終わり、橋本組は「かけす」の
 が終わってしまふこと。寂しく思っていた大
 地だった。気が分つた。切つたという思いで
 清々しい気分だった。二日間本当にお疲れ
 「えー橋本組の皆さん。力があつたからこそ、
 様でした！皆さんの力があつたからこそ、
 ここまで山車を運行することができた。ご苦
 練り返しにはなりますが、本当にご苦労様で
 した。」
 も、義郎さんは疲れ切つた表情を浮かべながら
 で終わる。数人がかりで「かけす」に山車を
 納車する。毎年この光景を見ると寂しい気持
 ちになる。「かけす」は祭りが終わった翌日
 に地元の建設会社に依頼して撤収してもら
 う。に「かけす」の入り口が分厚いビニールシ
 で覆われ、山車が見えなくなる。と、大地は疲
 きつた。体を引きずるようになつたとぼとぼと
 始めた。家に近づくにつれ賑やかな人の声は
 聞こえなくなる。楽しかった祭りからだんだ
 ん遠ざかる気がして、足取りは重くなつてい
 った。明日からの学校は本当に面倒だ。学校
 での楽しみは龍之介と会えることくらいだろ
 う。

大地を見下ろす星空は変わらず眩しかった。